

---

# robert plant



---

日本公演

---

2月16日 東京 郵便貯金ホール

主催 ■ 文化放送/ウドー音楽事務所

2月17日 東京 郵便貯金ホール

主催 ■ 文化放送/ウドー音楽事務所

2月19日 東京 渋谷公会堂

主催 ■ 文化放送/ウドー音楽事務所

2月20日 大阪 フェスティバルホール

主催 ■ ウドー音楽事務所

2月22日 名古屋 名古屋市公会堂

主催 ■ 中部日本放送

2月23日 東京 サンプラザホール

主催 ■ 文化放送/ウドー音楽事務所

2月24日 東京 サンプラザホール

主催 ■ 文化放送/ウドー音楽事務所

2月26日 東京 サンプラザホール

主催 ■ 文化放送/ウドー音楽事務所

---

招聘 ■ ウドー音楽事務所

協力 ■ ワーナー・パイオニア

協賛 ■ プリヂストーンタイヤ株式会社

PHOTOS by GEORGE BODNAR

ROSS HALFAN

NEAL PRESTON

PRINTING by L.D. KIKAKU

DESIGN by MASAHIKO ARAKI





Mr

ブリティッシュ・ロック・シーンに金字塔を築いたスーパー・バンド、レッド・ツェッペリンのメンバー、又史上最高のロック・ヴォーカリストとして君臨してきたロバート・プラント。ツェッペリン解散後、ソロ・シンガーとして鮮やかに復帰した彼は、時代に流されることなく今も王者たる貫禄と勇姿を誇っている。

ロバート・プラントは、1948年8月20日イギリスのスタッフォードシェアのプロウィッチに生まれる。父親はバーミンガムのエンジニアであった。小さい頃から音楽に興味を示し、彼はやがてウォッシュボード、カズー、ハーモニカの名手となる。将来の為に、公認会計士の勉強を3週間ほどするが、ブルースに魅かれてどっぷり浸り、ミュージシャンの道を選んだのである。初のステージは、喉頭炎になったシンガーの代役としてANDY LONG & THE ORIGINAL JURYMEN というバンドで歌ったこと。60年代中期、ロバートはバーミンガムのミュージック・シーンで活躍、THE DELTA BLUES BAND、THE NEW MEMPHIS BLUESBREAKERS、THE BLACK SNAKE MOAN、THE BANNED やTHE CRAWLING KING SNAKESらのグループでヴォーカルを担当する。

66年に、ロバートは後にグループ名をリッスンに改名し、シングル「ユー・ベター・ラン」を発表したテネシー・ティーンズの勧誘を受ける。又、18才の時、彼は2枚のソロ・シングル「アワー・ソング」と「ロング・タイム・カミング」をCBSからリリースした。これが今やコレクターズ・アイテムとなった幻の名盤である。初期の音楽キャリアの中で比較的知られているグループが、ジョン・ボナムも在籍したザ・バンド・オブ・ジョイである。だが、グループが解散後の彼は、Hobbstweedleというバンドのヴォーカルを担当したり、ブリティッシュ・ブルース・ムーヴメントの発見の父であった伝説の人、アレクシス・コーナーらと演奏していた。

そして1968年、ヴォーカリストのテリー・リードの推薦を受け、ジミー・ペイジとニュー・グループを結成する。ジミー・ペイジ、ロバート・プラント、

ジョン・ポール・ジョーンズ、ジョン・ポーナムの初顔合わせは、小さなリハーサル・ホールで行なわれた。当初はザ・ニュー・ヤードバーズと名乗ったが、すぐにレッド・ツェッペリンに改名し、バンドはスタートする。アトランティック・レコードと25万ドルで契約した彼等は、68年に『レッド・ツェッペリン』で衝撃的なデビューを飾った。ブルースをベースにしたハード・ロックで次々にセンセーショナルな話題を提供したツェッペリンは、ジョン・ポーナムが不慮の死を遂げ、バンドが解散する1980年までロック・シーンをリードし続けた。その12年間でツェッペリンは14枚のアルバムと「胸いっぱい

の愛を」、「天国への階段」、などの大ヒット曲を残し、71年と72年には日本上陸、そして全世界をツェッペリン旋風に巻き込んだ。ツェッペリンでのロバートは、ワイルドでダイナミックなロック・ヴォーカルを絶唱し、長髪をふり乱したアクションも相まって、今世紀最大のセックス・シンボルという名称をつけられたほど、世界中の若者を魅了したのである。

巨大な飛行船だったツェッペリンが解散した後、ロバートはソロ・シンガーとなった。81年2月にローカル・グループ、ザ・ハニードリッパーズとのステージで復帰した彼は、以前から親交を深めていたギタリストのロビー・プラントを伴って小さなクラブでの演奏を続ける。そして同年9月、ロバートとロビーは、ベースのポール、キーボードのジェズ、ドラムスのコーギーとロックフィールドでレコーディングを開始。82年6月、ソロ・デビュー作『11時の肖像』はリリースされた。7月に入って続くニュー・アルバム『ザ・プリンシプル・オブ・モーメンツ』のレコーディングにかかり、83年7月に発表する。8月下旬から10月までは全米、11月からは全英と、ソロになってから初のツアーに臨み、超満員の観客を依然衰らぬハイ・パワーで圧倒したという。

約12年振りに日本のステージに立つロバート。「ツェッペリンの曲は好きだけど、ツェッペリンなしでは歌えない」という彼の言葉が示すように、今夜の公演では今を生きるロバートの姿をまざまざと見せつけてくれるはずだ。



正直に言って、今だにレッド・ツェッペリンのロバート・プラントを僕は引きずっている。このコンサートにしても、全く新人の中年ヴォーカリストのものであったなら、それほど強い興味を抱かなかっただろう。やはりあのレッド・ツェッペリンのロバート・プラントだからこそ、何がしかの関心を持って行くのである。ロバート・プラントにとっては余りありがたい客かもしれないが、無視できる程少数とは思えない。

ロバート・プラントのインタビューを読むと、必ずツェッペリンについての質問が $\frac{1}{3}$ ぐらいの分量をしめている。ひどいものになると半分以上がツェッペリンについての話だったりする事がある。やはりインタビューアや読者の欲求がツェッペリンについて高い事から来るのだろうが、ロバート・プラントにとって楽しい事ではないだろう。どのインタビューでも、自分はソロ・アーティストであり、ツェッペリンのロバート・プラントではないと、しんぼう強くくり返している。当分、こうした消耗な作業は続くだろう。こう書いている僕だって、日本でインタビューする機会を持てばツェッペリンについていろいろ聞くに決まっているのだから。

原則論的に言えば、現在のロバート・プラントはソロ・アーティストとしてのロバート・プラントであり、そこにツェッペリンの影を見るのはファン、あるいは評論家として正しくない態度である。だから原則論として、そうした事は止めなければならないのだが、別に正しい正しくないでファンをやっているわけではない。ごくごく情情的にファンをやっ

ているわけで、それはどうしようもない事である。ただ僕にしてもツェッペリンの影を求めてるといって、ロバート・プラントに今更「天国への階段」や「カシミール」を歌ってもらいたいわけではない。むしろ、そんな事はしてもらいたくない。はっきり言ってそれは非常にみっともない事であり、ファンとしてツェッペリン・ナンバーで盛りあがるのはみじめである。簡単に言ってしまうとソロとしてツェッペリンを葬り去るだけの仕事をしてもらえればそれでいいのである。残念ながらロバート・プラントにしるジミー・ペイジにしる現在のソロ活動はツェッペリンを超えているとは言いがたい。こっちの期待が大きすぎるのか、ソロを聞く度にツェッペリンというユニットの素晴らしさ、奇跡的な見事さを再認識させられる結果となる。実に歯がゆい。最近インタビューでジミー・ペイジはツェッペリンは結局「天国への階段」を超えられなかったなどと弱気な発言をしていたが、思わず「そんな事ないじゃないか、もっと自信持ってくれよ。」と言ってやりたくなってくる。ロバート・プラントはジミー・ペイジなどより発言は強気で音楽活動に対しても積極的である。実際に自分のソロ活動に対して自信を持っているようだ。それはそれで頼もしいし、中年ロッカー大集合コンサートで歌のない「天国への階段」を演ったジミー・ペイジ(イギリス、アメリカの評論家には何故か、この演奏は好評だったらしい)より評価できる気がするが貧欲なファンにはまだ不満なのだ。

良く知られているように初期のツェッペリンは作曲も作詩も全てジミー・ペイジが担当していた。プ

ロデュースは一貫して彼であるので、まあ一枚目のツェッペリンはジミー・ペイジのワンマン・バンドに近いものだったと言っていいだろう。それは非常に優れたものであったが、後期のツェッペリンと比較すればまだ偉大なる可能性といった段階でしかない。その後、ロバート・プラントは作詩作業を中心に大幅に制作に関与する事になる。ツェッペリンの一種混沌としたパワーと魅力はロバート・プラントのもたらしたものが多いうだ。かの「天国への階段」の完璧とも言える詩も彼のものだし、ロバート・プラントがツェッペリンの中で果たした役割は今更言うまでもなく巨大である。特にソロを聞いてみると、曖昧でありながら圧倒的な質感と重量感を持つ音というのはロバート・プラントの仕事である事がよくわかる。ただこれもソロの中にツェッペリンからの進化した方法論や実践を発見するというよりは、ソロの中からツェッペリン的要素を抽出しつつ、ツェッペリン内における彼の役割を判断するという、はなはだ不健康なやりかたで考えた事なのだが。つまりロバート・プラントがツェッペリン時代に進んでいた偉大な音の実験がソロに到ってまだ本格的に結実してはいる。それはそれでしかたがない事だが、むしろ後退的な印象を持ってしまうのは、僕の先入感のせいなのだろうか。いや、そんな事はない。絶対にロバート・プラントはもっと大きな仕事をできる才能と方法論を持っている。10年以上のファンは断言できる。このコンサートがその進歩の確認となる事を切に期待する。

## 青山悌三 (FM東京)

を『今日のお客はまるで分かってない』とか『質が悪い』とか決めつけるのは絶対に許されないことだと思うんだ。音楽ってものは、聴く人の心に耕される創造と思考の世界なんだよ……』と。これだけでも、ロバート・プラントの人間的な魅力を分かっていたただけだろうと思う。

さて、12年ぶりに日本のステージに立つロバート・プラント。レッド・ツェッペリンの時よりもひと回りもふた回りも自由になって、まもなく彼のメッセージを我々にぶつけてくるだろう。35歳にして、やっと自分のベストをつくせる状態をつかんだ彼。「歌える限り歌っていききたいよ……」と意欲も満々。きっと興奮の時間になるだろう。曲は昨年暮まで行なわれたUKツアーと全く同じと聞いている。

最後に、現在、来日記念シングルとして「イン・ザ・ムード」がヒット中だが、日本公演のあと3枚目のアルバム制作にとりかかるらしい。その内容はいろいろなタイプの音楽で、ロバート・プラントの持っている要素を全て盛り込んだものになりそう。それもファンとしては楽しみに待ちたい。

来日してから3回目、それも12年ぶりのステージ——。自然に、そして押さえきれない程の興奮を覚えます。

さて、今でこそロック・グループにはヴォーカリストの存在は欠かせませんし、ヴォーカリストがそのグループのカラーと言うかセールス・ポイントになっていて、大きなパワーにもなっている訳です。勿論、ロバート・プラントなくしてはツェッペリンの人気も半減していたのではないのでしょうか。そんなグループの要とも言うべくリード・ヴォーカリスト、ロバート・プラント。彼はグループのセックス・シンボルと騒がれながらも、常に自分の位置、立場を冷静にとらえている歌手の一人です。ある雑誌のインタビューに次の様に話しています——。

「セックス・シンボルなんて言われて有頂天になるようじゃ、そいつの人生は終りさ。もし僕がそう言う目で見られているとしたら地獄さ。僕は一流のミュージシャンだし、世界的な人気者である事は確かだ。しかし、それが何だって言うんだ。果たして価値のある事だろうか。僕のまわりには僕より歌のうまい奴もいる。要するに僕自身に必要とされているのは常に正直であり、自分を見失わないって事なんだ……」と。

そして又、今日のように彼の人気こんにちがしっかりと地についている理由の一つとも伺える話を紹介してみよう。

「僕が一番いやなのは、聴衆を区別したり、差別したりする事だ。コンサートに集まる人々は、皆一人一人違った理由、違った目的を持っている。それ

1968年、まさにこれから激動の時代へはいろいろとしたブリティッシュ・ロック・シーンの時期に結成されたレッド・ツェッペリン——。当時、彼等のデビューは、今まで続いていたビートルズの王座を奪い取る程、ハード・ロック旋風の目として台頭してきました。その後の活躍はご存知の通り。

さて、そのレッド・ツェッペリンのメンバーの中でジミー・ペイジとともにグループの柱と言うか人気の原動力となっていたのが、今夜の主演、ロバート・プラントであった訳です。1980年、ツェッペリン解散後、どのメンバーよりも早く、ソロ活動を始めたのが、ロバート・プラントでもありました。

1982年、全米ヒット・チャート、ベスト10内にランクされた彼の初めてのソロ・アルバム『11時の肖像』がリリースされました。このアルバムには、コーギー・パウエルやフィル・コリンズ等、現在でも一流と言われているミュージシャン、プレイヤー達が参加していて、今でも一聴に値するアルバムと言えます。続いて昨年リリースされたアルバム『ザ・プリンシプル・オブ・モーメント』からのシングル・ナンバー「ビッグ・ログ」が世界的にヒットし、彼の人気と実力をあらためて示してくれました。

ドラマーにフィル・コリンズを迎えて行なわれた昨年夏からの全米ツアーの成功に続いて全英ツアーも英国のファンを興奮の渦に巻き込む程、熱狂に包み込んだと聞きます。そんな彼にとっても最高の状況の中で、来日ステージが見れ聴かれると言うのも、我々ファンにとってはまたとない喜びではないでしょうか。1971、72年にレッド・ツェッペリンとして

o  
↓  
u

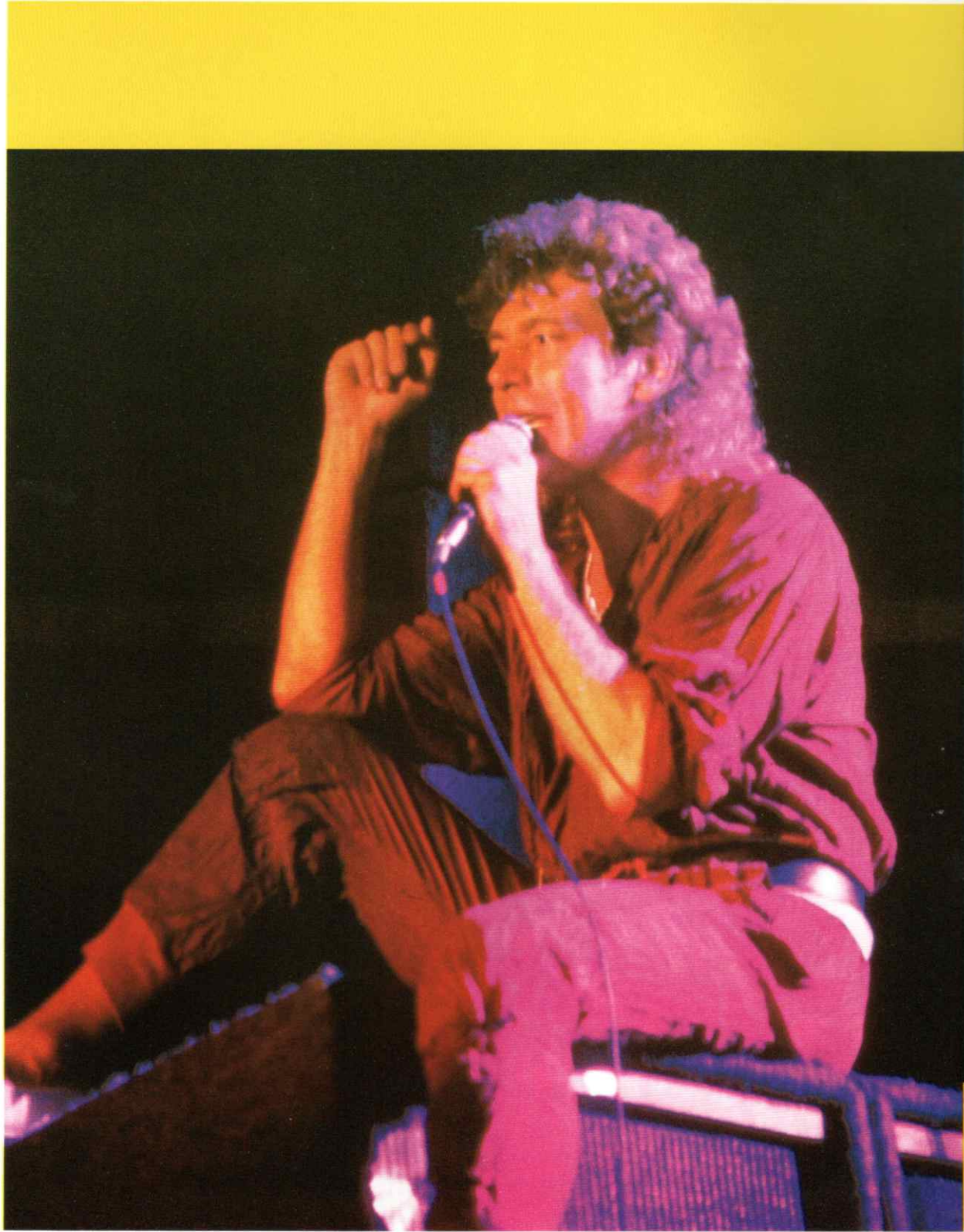


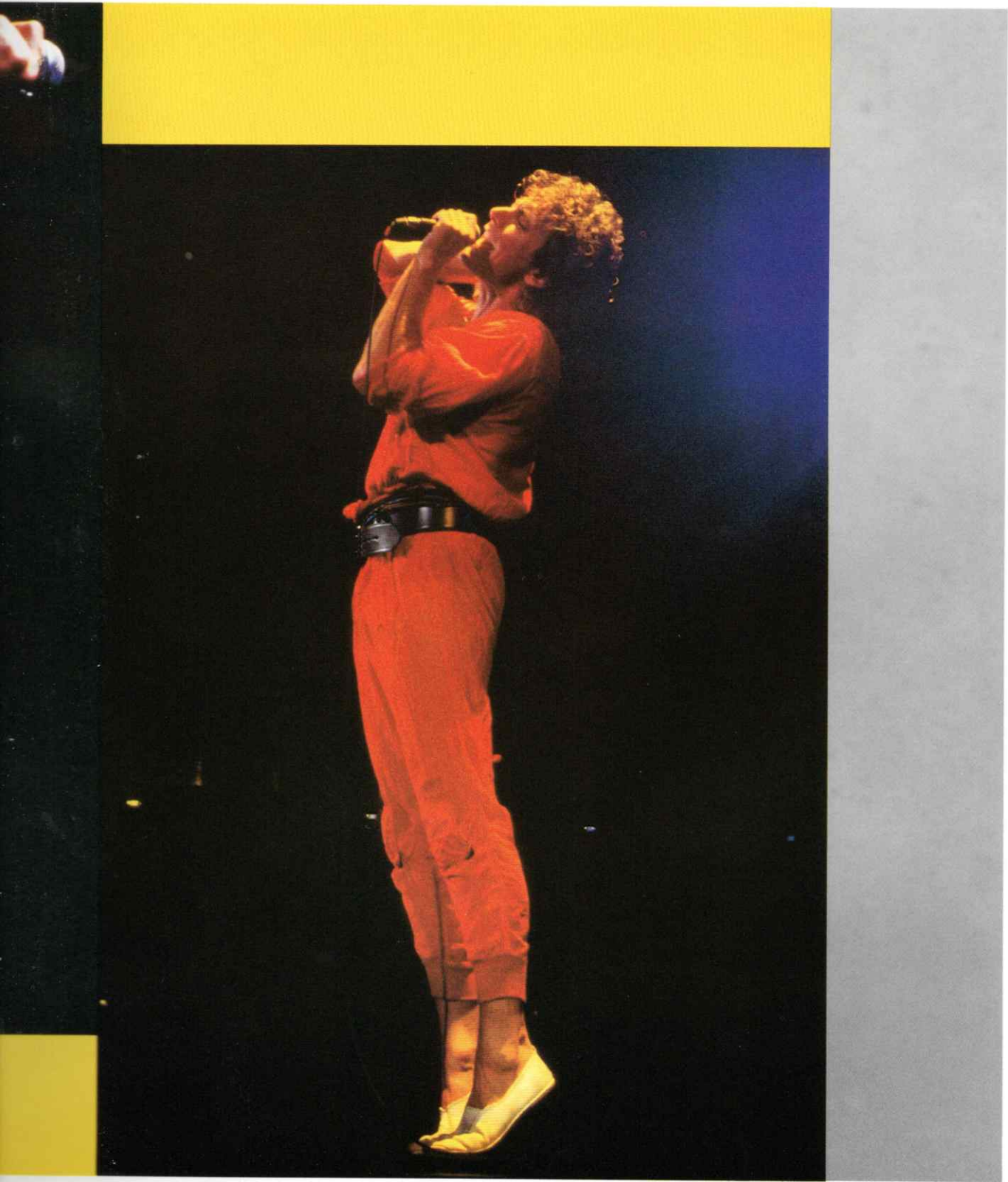




0/4

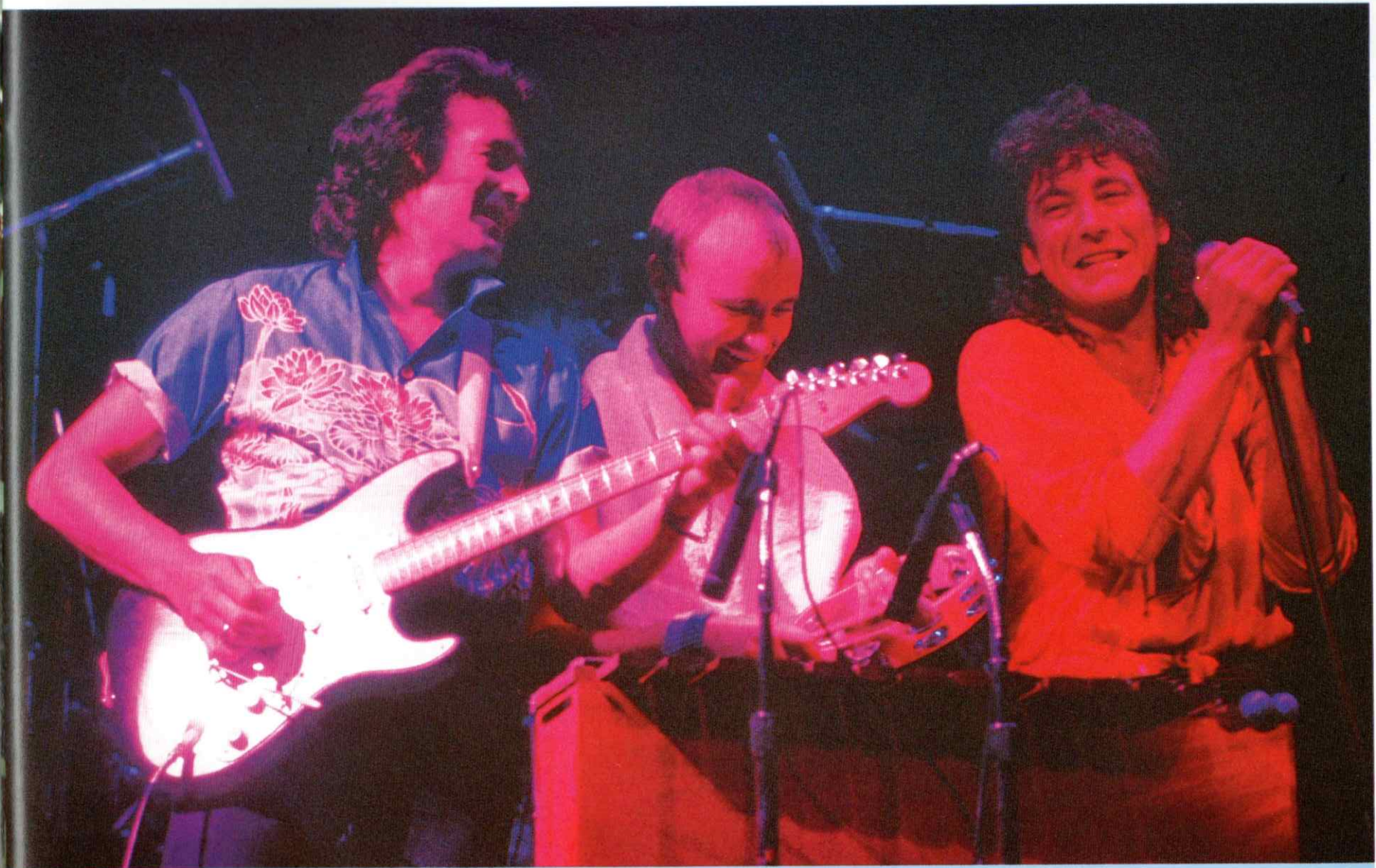
10

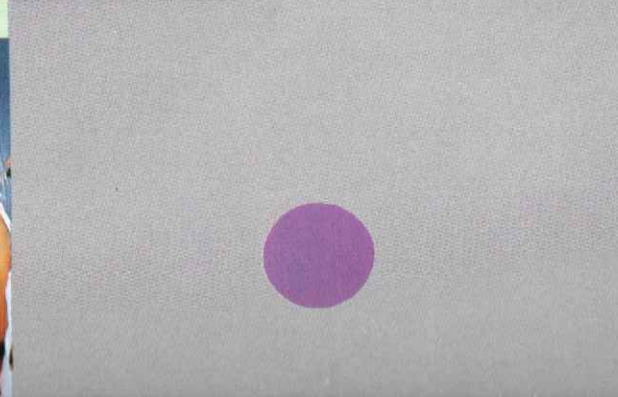
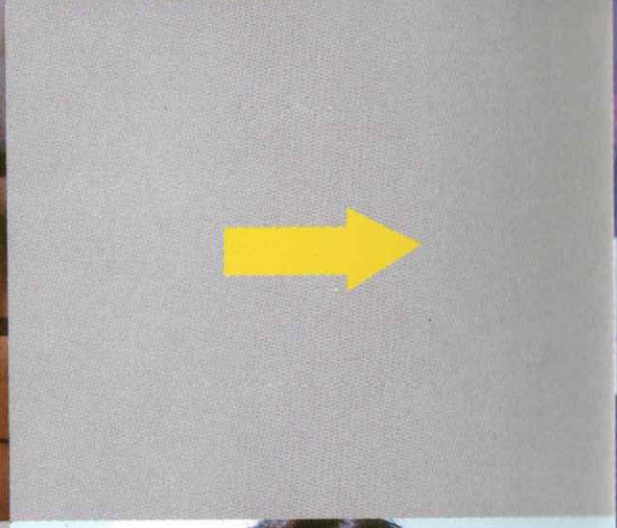
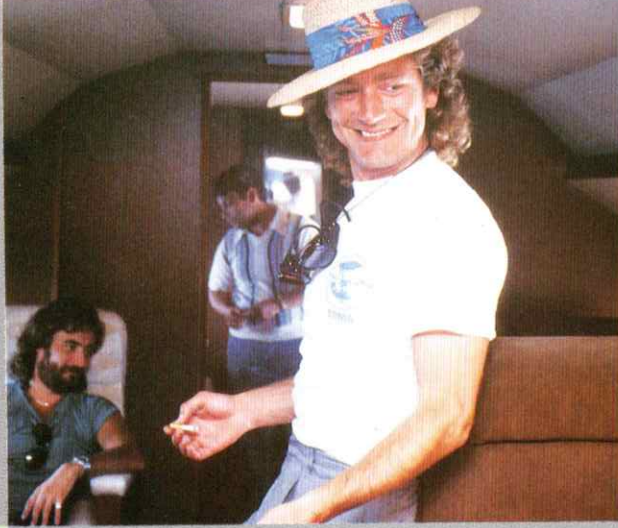
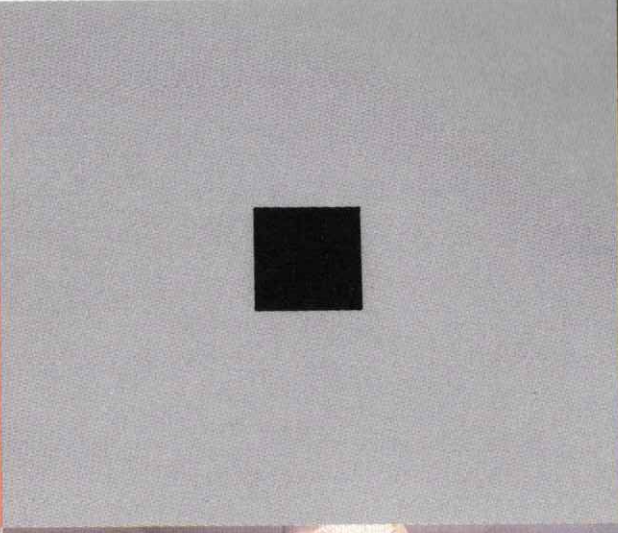
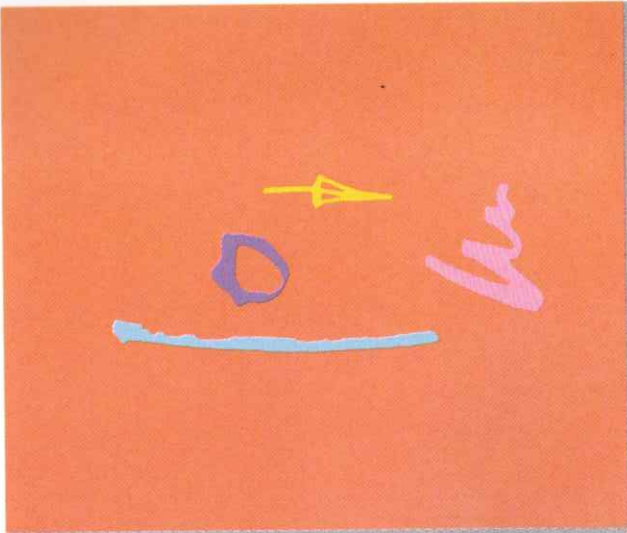


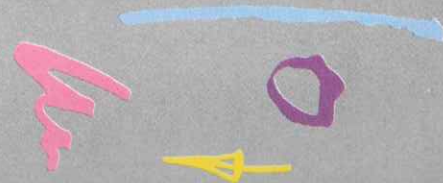
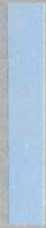


0

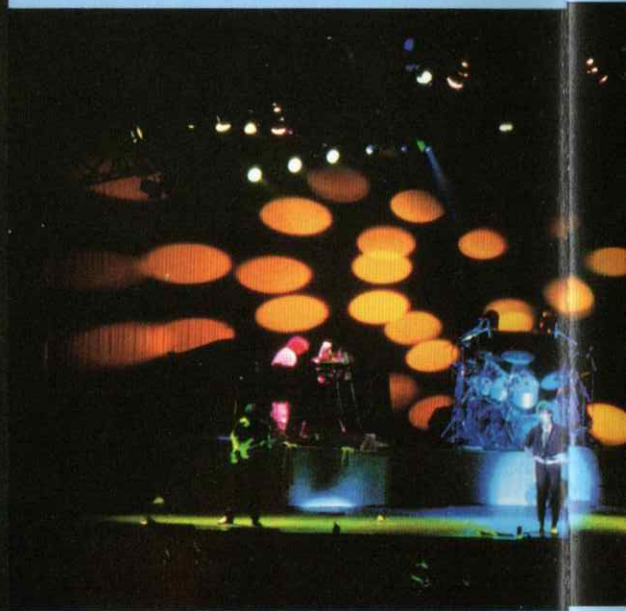




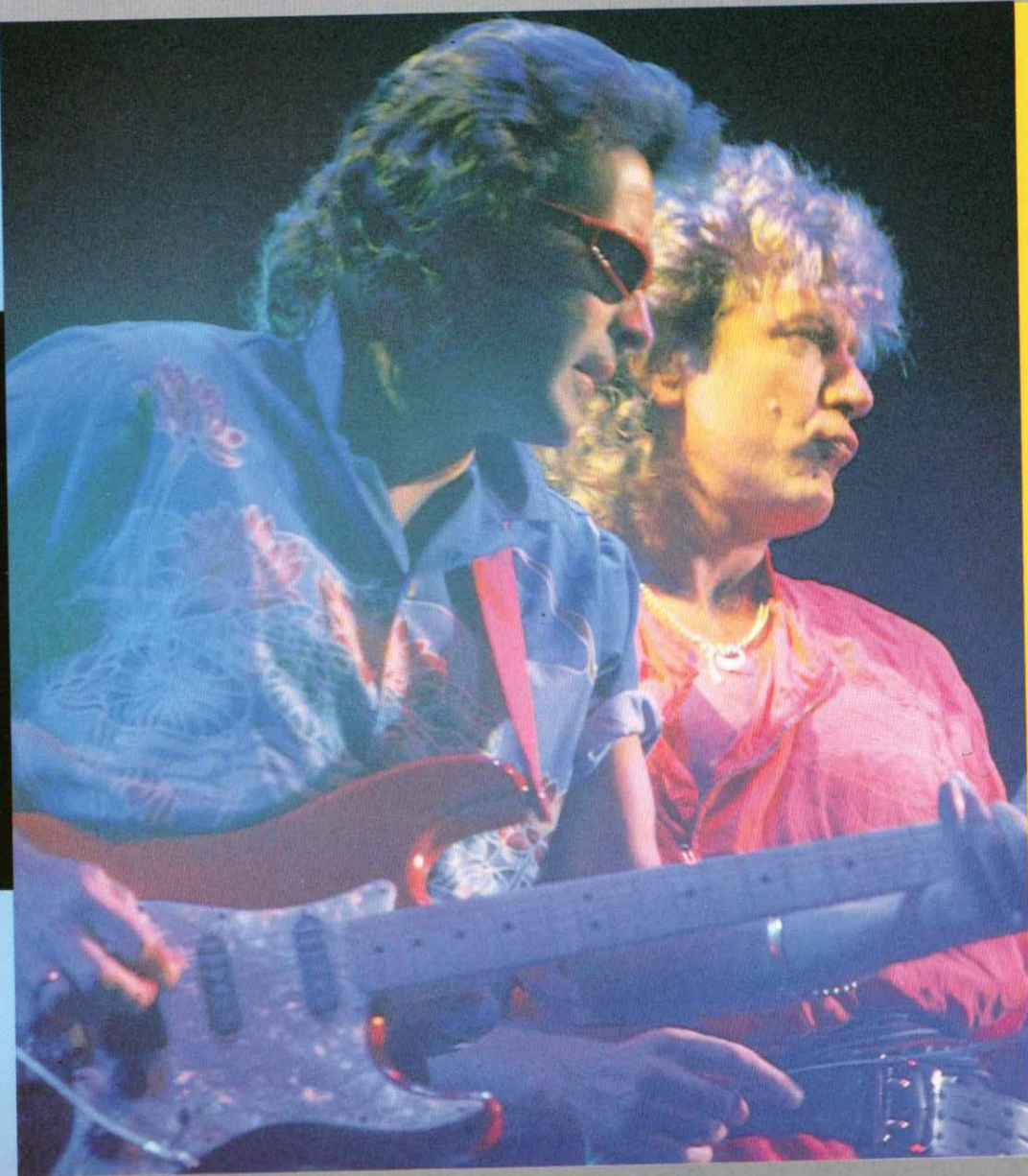
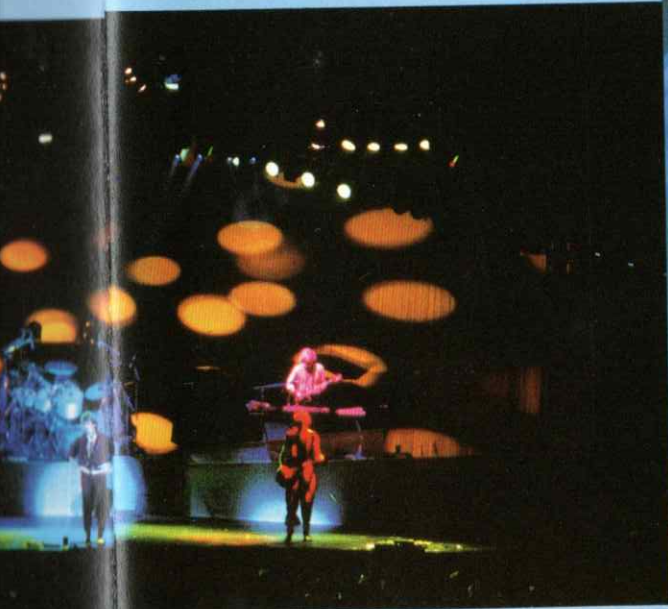




10  
↓  
An





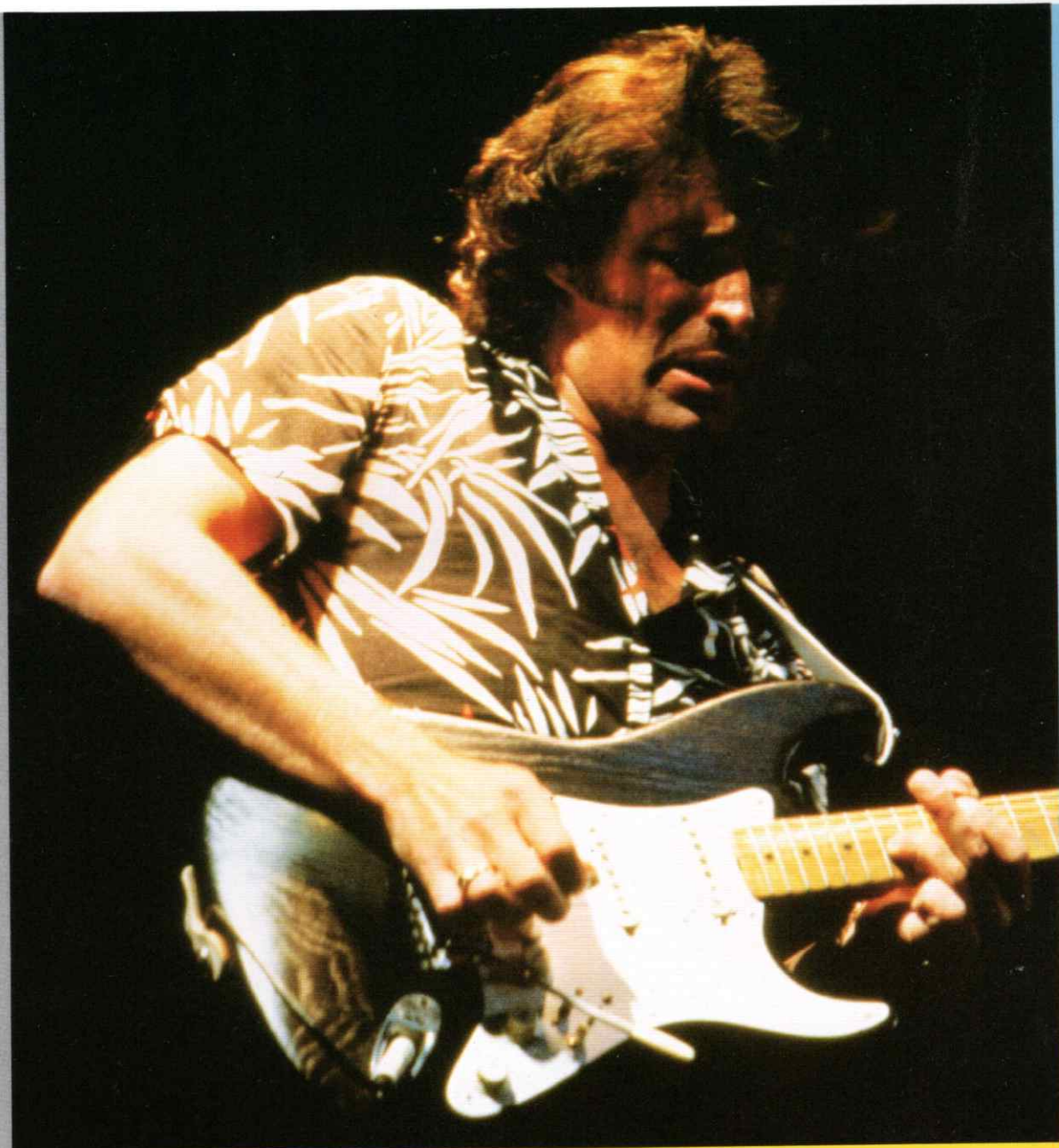


*W*



E

M



**ROBBIE BLUNT**  
ロビー・ブラント (ギター)

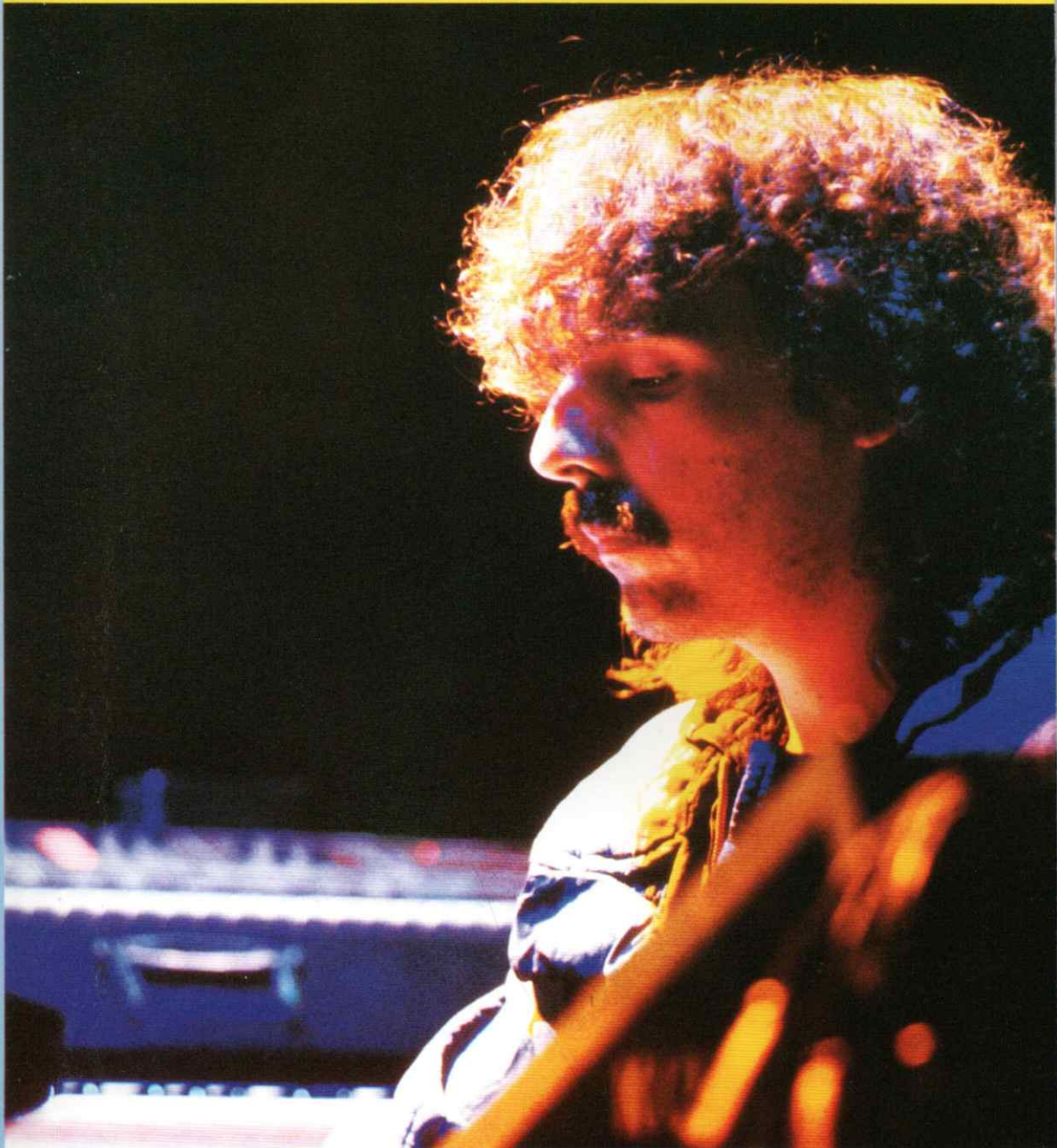
イギリス、ウォーチェスターシャー生まれの彼は13歳の頃からギターを弾き始め、いくつかのローカル・ブルース・トリオを経て、初めてのメジャー・バンド、ブロンコに参加、2枚のアルバムをリリースしてアメリカをツアーした。バンド解散後は、マイケル・デ・バレスのシルバー・ヘッドと組み、続いてスタン・ウェブ、リトル・エーカー、スティーヴ・ギボンズ・バンド、ウェポンズ・オブ・ピースにおいてプレイしている。1981年の初めにハニードリッパーズをバックに歌っていたロバート・プラントと仕事をして以来、彼はプラントのソロ・キャリアにおいて重要な位置を占めている。

**B****E**

## JEZZ WOODROFFE

ジェズ・ウットロフ (キーボード)

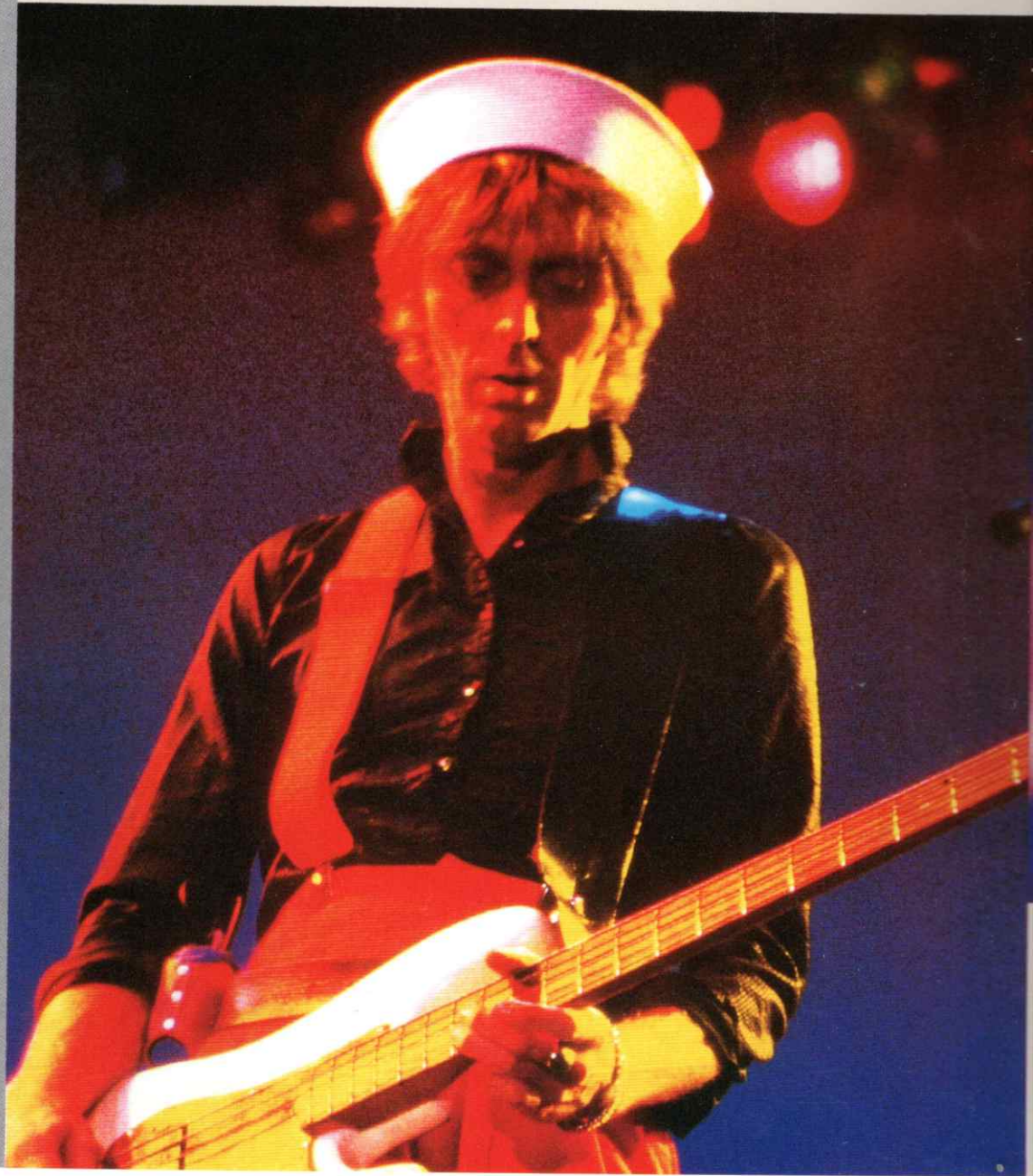
1970年代にブラック・サバスのレコーディング、ツアーに参加して、すっかりロックン・ロールに飽きた彼は、イギリス、バーミンガムにある兄の楽器屋でキーボード部門を担当、それがいつの間にか繁盛していた。そして、同時にソロ・アルバムを制作したり、テレビやドキュメンタリー・フィルムの音楽も手がけた。ある時、ロバート・プラントが楽器屋を訪れ、彼をセッション・ワークのメンバーとして誘い、それを機にロバート・プラント・バンドには欠かすことの出来ない人物として今日に至っている。



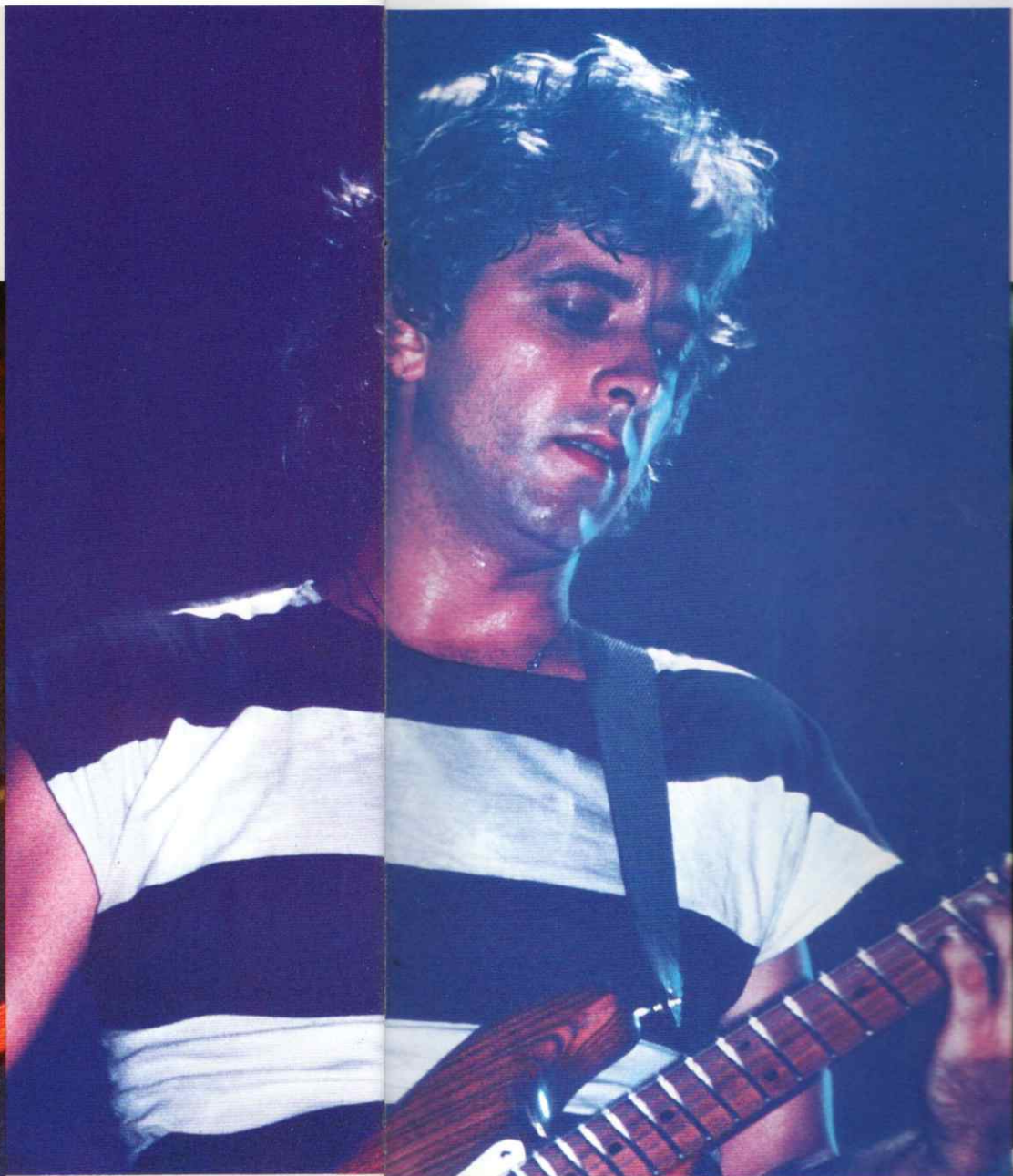
Mr. 04

**PAUL MARTINEZ**  
**ポール・マルチネス**  
(ベース・ギター)

イギリス、レイチェスターに生まれ育ち、多くのローカル・バンドで活躍後、ギターをベースに持ちかえて、1969年ロンドンへ出向き、エルマー・ガントリーと組む。その後、ストレッチ、ベイス・アシュトン・ロード、ジョン・オトウェイ、ザ・アドバーツ、スタン・ウェブとプレイを続ける中で、ギタリストのロビー・プラントと出会い、彼を通じてロバート・プラントのバックをつとめることとなった。



ーに生まれ育ち、多くのローカル・バンドで活躍後、  
て、1969年ロンドンへ出向き、エルマー・ガントリー  
、ベース・アシュトン・ロード、ジョン・オトウェイ、ザ・  
とプレイを続ける中で、ギタリストのロビー・ブラント  
ロビー・ブラントのバックをつとめることとなった。



**BOB MAYO**  
**ボブ・メイヨー**  
(ギター、キーボード)

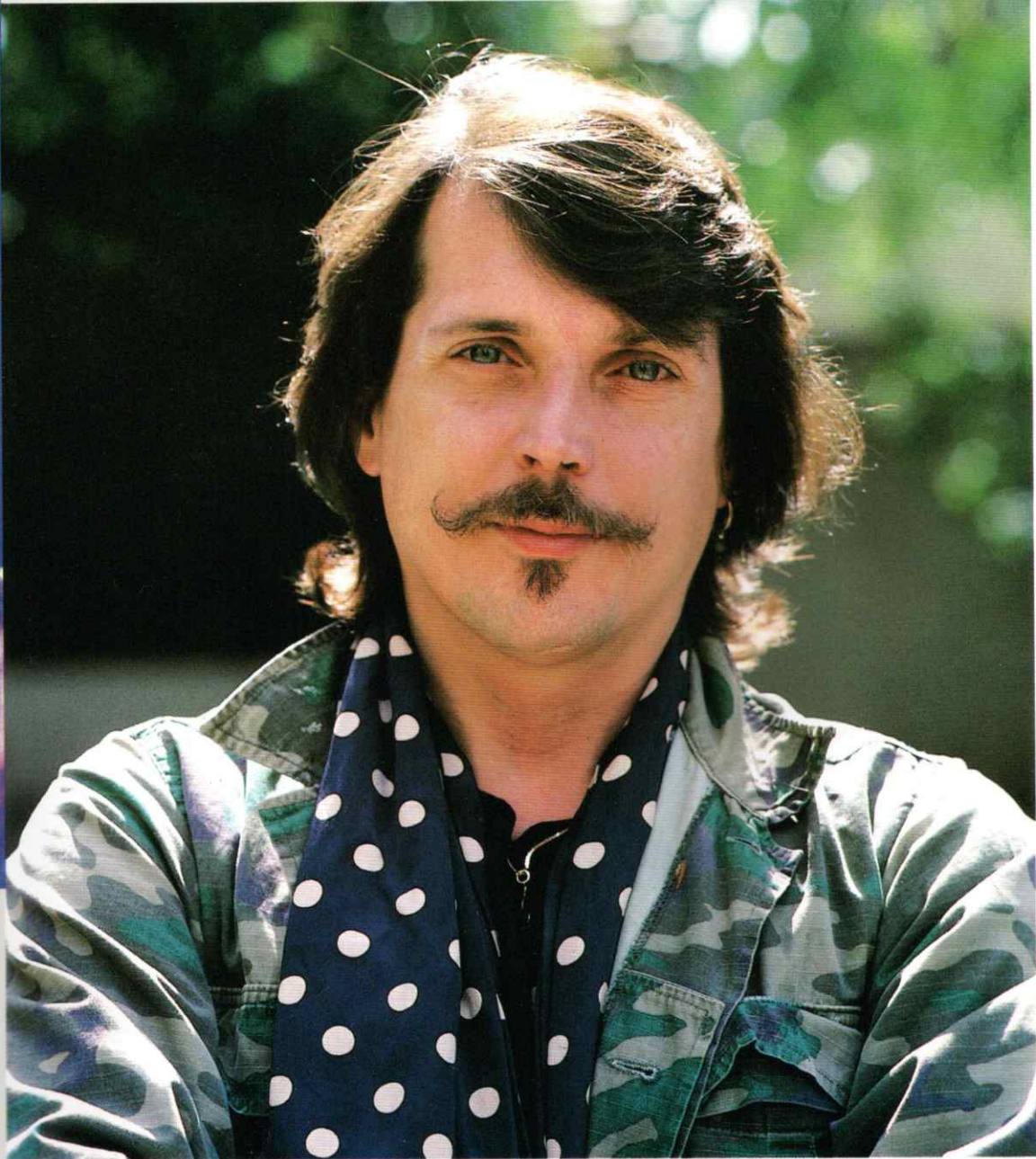
▲  
実に才能豊かなプレイヤーである彼は、この10年間に亘ってフォリナー、  
エアロスミス、イアン・ハンター、ピーター・フランプトンといった多くのトップ・ミ  
ュージシャン達との経験を積んでいる。中でもピーター・フランプトンのツアー  
では来日経験も持つ大変なベテラン。ロビー・ブラントの2枚のソロ・アルバ  
ムには参加していないが、ライブでのサウンドを高めるために今回の起用と  
なった。

# RITCHIE HAYWARD

## リッチー・ヘイワード

(ドラムス)

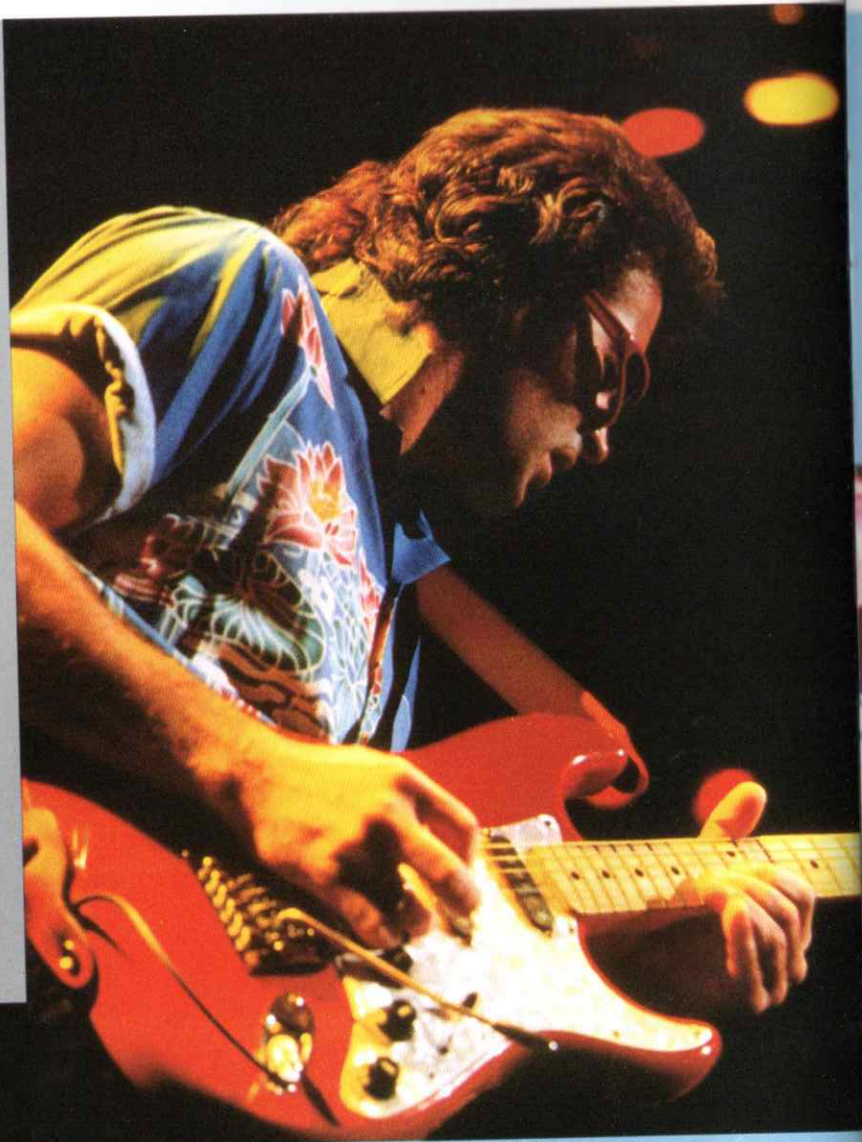
アメリカ、アイオワ州のデス・モインズに生まれ、1966年初めてのバンド、ザ・ファクトリーにローウェル・ジョージと共に参加する。その後ローウェルとリトル・フィートを結成し、12年間に亘ってそこでドラムを叩いた。解散後はアル・クーバー、ライ・クーダー、ジョン・アーマトレイディングをはじめ、世界的なプレイヤーと仕事をしている。ロバート・プラントのバンドには、フィル・コリンズの後を受けてイギリス・ツアーからの参加である。



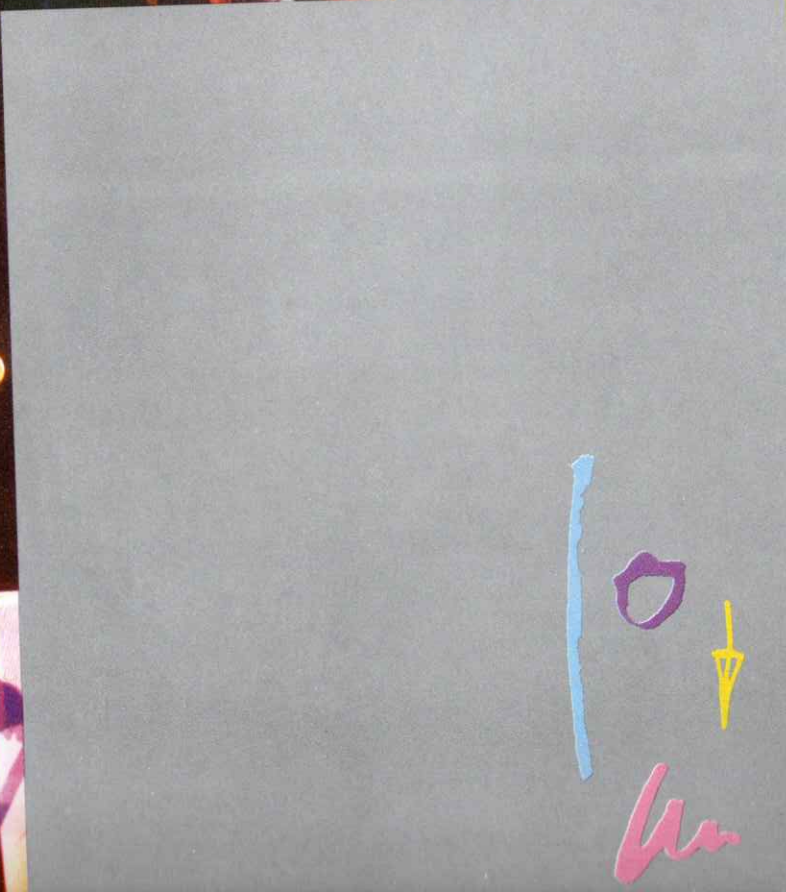
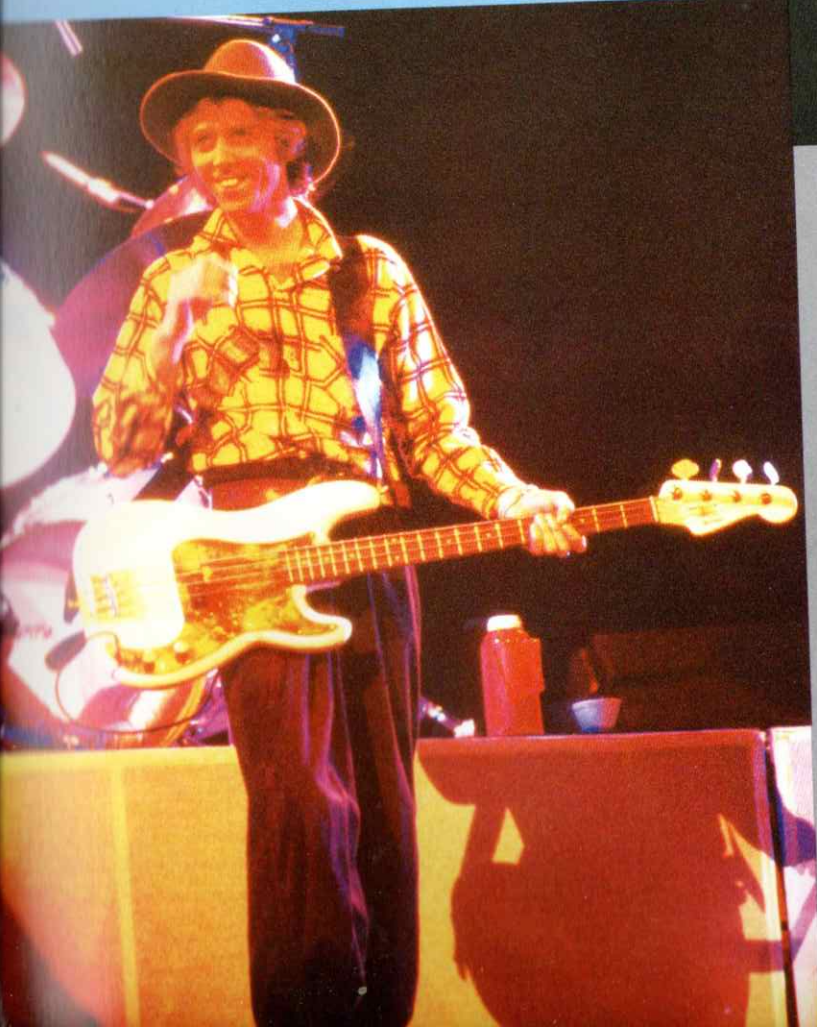
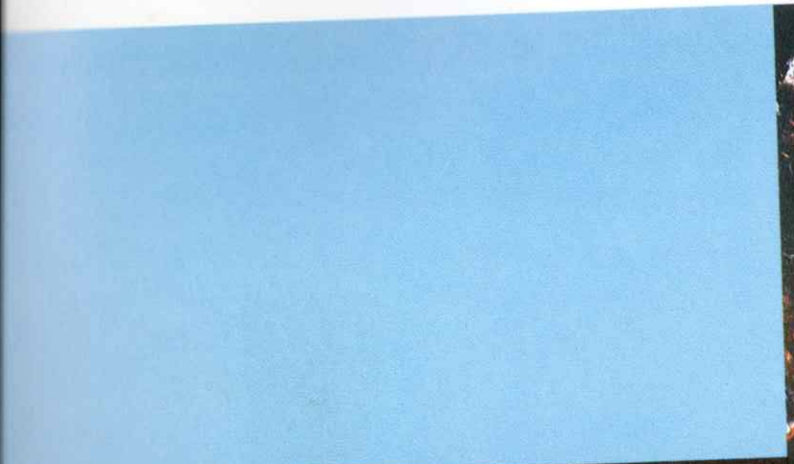
亘ってフォリナー、  
った多くのトップ・ミ  
ランプトンのア  
の2枚のソロ・アル  
めに今回の起用と



Hand-drawn graphic elements on a grey background, including a blue vertical line, a purple circle, a yellow triangle, and pink cursive text.







| o v  
u



0  
M  
A





401



AN UDO ARTISTS PRESENTATION 1984 ROCKUPATION '84 第4弾

**UDO**  
ARTISTS, INC.